跡見学園女子大学紀要　第三十二号（一九九九年三月十五日）

ヘミングウェイの生と死(二)

(二) *Indian Camp*

The Life and Death of Ernest Hemingway II

2. *Indian Camp*

木下　高徳

概　要

シンボリズムのスタイルにハードボイルドのスタイルを乗じた方法で、言葉を究極まで削りに削ることによって、作品を磨きに磨こうとしたヘミングウェイは、両スタイルの行き着くところの一つとして、主人公が一言も言葉を発しない物語りの創作という、至難の挑戦を試みた。しかも処女作品集とも言える短編集に、巻頭の物語りとして、その挑戦の結果である作品（*Indian Camp*）を載せた。

この作品で、わずかに言葉を発するのは、カメラアイの役目を負わされているニックを除けば、白人たちだけで、主人公であるインディアンの夫をはじめ、他のインディアンたちも一言も言葉を発しはしない。かくして主人公であるインディアンの夫の感情と千思万考は、言葉を発しないという負の行為、および壁に向かって寝返りをうつという動作によって表現され、さらには彼の自殺という行為とその方法ならびに自殺直後の姿勢に関する描写によって、彼の追い詰められた苦境の中での、高潔で愛に溢れた人間としてのありようが、表現されているのである。

Key Word : Hemingway, Ernest, Indian, Camp, Nick, Suicide.

I

主人公が、たとえ短編小説の中でにせよ、一言も言葉を発しない物語りを書くなどということが、はたして可能であらうか？　言葉を唯一の媒体として成り立つ小説において、常識的に考えて、これが可能だとは思えない。だが言葉を極限まで削りに削り、作品を磨きに磨くことを自分の文学の存在理由の主たる一つにした作家であったら、主人公が一言も言葉を発しない物語りを書くという、前人未踏の高所への挑戦、という願望が、作家に脅迫的に取り憑いて離れない可能性はある。だが、はたしてそういう願望に取り憑かれるほどの極限まで、言葉を削りに削ろうとした作家が、これまでに存在したであろうか？　もし存在したとしたら、ヘミングウェイこそ、まさにその稀な芸術家の一人であることに間違いはない。

そういう至高の高所を目指す挑戦の魅力に思い至り、挑戦を試みようとした作家は、数は多くはないにしろ何人かはいたにちがいない。だがそのほとんどは不可能だと諦めざるを得なかった、と予想しても間違いはなかろう。しかしヘミングウェイは諦めずに執拗なる挑戦を試み、ついに高所を極め、成果を処女短編集の巻頭の物語として結実させたことを、*Indian Camp* を読んで読者は理解することになる。

主人公が一言も言葉を発しない小説――考えてみれば、これこそハードボイルドのスタイルの最たるものであり、またその理想の行き着く最高所に在るものだ。この地点はまたハードボイルドのスタイルの尾根がシンボリズムのスタイルの尾根と最高所で交わるにふさわしい頂点でもあろう。この作品でも同様に、ヘミングウェイはこれら二つのスタイルを相乗するという方法で、言葉を極限まで削ろうとしているからだ。

とすると、この作品も前回解釈した作品同様、重層構造を成していることになり、解釈のほとんどすべては、読者の手に委ねられていることになる。こういう地点で作品を書く作家の作品を読みこなすのが、読者にとってかなり困難な作業であるのは仕方のないことであろう。読者の程度に合わすなどということは一切考えず、ひたすら芸術の最高所のみを目指したヘミングウェイの作品が難解であるのは、当然であるからだ。

とくにこの作品は、読みこなすうえで、もう一つの困難を読者の手に委ねているがゆえに、難解さが倍加している作品でもある。それは、すべてが幼い少年の目を通して観察され、物語られているという点である。したがって読者の手に、幼い少年の目で観察されたすべてを、大人である自分の目で観察しなおし、幼い少年には理解できなかった大人たちの言葉や行動を、推量・把握するという作業が、委ねられているということになる。とは言っても、大人の目で見直せば、登場人物たちの言動の多くから、彼らの心に潜む恐れ、焦り、悔恨、懊悩、反省および決断と実行などが現れては消えるさまが、容易に看て取れることにはなるのだが。

II

さて大人の目で観察し直すと、この短編では冒頭から登場人物たちの

行動に関して、奇妙だと考えざるをえない場面を、作者は次々に読者に突き付けている。

まず、ニックの父である医者を二人のインディアンは迎えにやってきたのに、なぜニックも連れられていくのか、である。幼い少年を、しかもだれもが深睡している夜明け前という時間の、暗闇の湖へ？　医者の弟であるアンクル・ジョージが行くので、一人残しておくわけにはいかない、と考えると、ではなぜ医者でもないアンクル・ジョージは行かなくてはならないのだ？　という疑問に行き当たる。ニックと共にあとに残ればよいはずである。そういえば、その後のアンクル・ジョージに関する描写は、奇妙な行動の連続となっている――たとえ数十秒にせよ、あとに離岸したアンクル・ジョージのボートの方が、なぜ医者のボートより先を行き、医者よりも早く湖を渡ってしまうのか？　なぜ湖を渡ったアンクル・ジョージは、医者を迎えにきた病人の父親と病人の兄弟と思われる二人のインディアンに、たばこをやったりする理由があるのだ？　なぜアンクル・ジョージは、医者につづいて病人の父親や兄弟よりも先に、病人の横たわる部屋に入るのだ？……

おかしいのはアンクル・ジョージの行動だけではない。たとえばインディアンの男たちがみな、病人である妊婦の苦しみの悲鳴の聞こえない場所まで避難しているのもそうである。彼らは妊婦の陣痛がはじまった二日前からここに避難しているわけではあるまい。では夜明け前に彼らが避難しているのは、いったい何からなのか？　彼らが避難しなければならないほど恐れているのは、いったい何なのか？

これらの疑問からだけでも、アンクル・ジョージとインディアンとの過去および現在の関係と状況について、作者が語っていることを理解するのは容易であるが、白人とインディアンとの関係は、読み進むうちにさらに明らかになって行く。だが疑問はしばしそのままにしておいて、まず物語の冒頭の四人の男たちと一人の幼い少年が、湖を渡ってインディアンのキャンプへと移動して行く描写は、どのようなイメージを内包して描かれているかについて考えておこう。

The End of Something と同様、湖が女性のイメージでもって描かれているのは間違いがないであろう。ではボートを漕いで女性の領域へとはいり込んだ五人の男たちが辿って行く風景描写は、いかなるイメージで描かれた風景なのであろうか？

They walked up from the beach through a meadow that was soaking wet with dew, following the young Indian who carried a lantern. Then they went into the woods and followed a trail that led to the logging road that ran back into the hills.(1)

それにしても、これは、エロティックなイメージに満ち満ちた描写だといえる。五人の男たち、とくにニックにとって薄暗闇の中を導かれて行くこの旅は、まさに人間の生誕の根源へと溯る旅、子宮へと回帰する旅のイメージで描かれていると理解するのは容易であろう。

インディアンの夫が二段ベッドの上段に寝ていて、自分の下方で行なわれていることを、高い位置から見下ろしている、という描写は、彼がこの場に集う人たちの中で、精神的に最も高い位置に位する人間であることを示していることになる。

「インディアンの夫は三日前に、斧で脚に大怪我をした」、つまり動けない、動きが取れない状況にあると説明されるが、それが何日前からかというときに、ここでも多数を表す〈三〉という数字を使うことで、はるか昔よりこのような動きの取れない苦境の状況にあることが暗示されている。

大怪我をしたり、大手術を受けたりしたとき、堪えられない激痛に苦しめられるのは、一昼夜前後であろう。それ以後は、身体を動かせば激痛が戻るが、動かさなければ堪えることはでき、時間と共に痛みは軽減していくことになる。したがって、三日前に大怪我をしたインディアンの夫は、今はじっとおとなしくしていさえすれば、激痛を感じないですむ状態にある、と描かれていることになる。一方、彼の妻の方は、彼の怪我による激痛が堪えられる程度にまで軽減したまさにそのとき、二日前、陣痛がはじまり、それ以後二日間、難産のために激痛の中をのたうち回っている、と描写されている。ここには、過去から物語現在に至るアメリカン・インディアンたちの悲惨な歴史と現状が集約的に語られていることは間違いない。

医者を先頭に一行が小屋に入ってきたとき、インディアンの夫が、小屋からは声の届かない場所へと避難した不安なインディアンの男たち同様、煙草をふかしているのを、少年の目が捕らえる。だが医者に挨拶をしたり、往診の礼を示す言葉も態度も少年の目に目撃されはしない。医者がやってきてほっとした様子はなく、むしろ煙草をすうことによって、自分の心を占拠する何かに対する葛藤を静めようとしているかのようである。

それにつづく描写――

The room smelled very bad.(2)

は何を語っているのであろうか？　かつては自分たちのものであったが今は奪われてしまった樹木を、奪った張本人である白人のために切り倒すことによって、口を糊しているインディアンたちの苦境と貧しさであろうか？　とすれば、路もない遠いインディアン・キャンプへの路程の描写とあいまって、白人の医師が決して往診などしない場所であることを語っていることになろう。ではなぜニックの父はこのような治療代も払えぬ、人間とは当時の白人が認めていないインディアンの住むキャンプに、しかも夜明け前などという時間に、往診にでかけなければならなかったのであろうか？

医師であるニックの父は、インディアンの迎えのボートに乗ったときには、病人に手術を施さなくてはならないことを予期していたと描かれていることは間違いない。手術用の道具の代用としてジャックナイフ、釣り針、釣り糸などを、ハンカチに包んで持参しているからだ。さらに

は医師は、手術のあいだ、ニックを手元において置かなくてはならない、つまり帝王切開の手術を目撃させなくてはならない羽目に陥ってしまった、と確信していたことになる。たとえ、「赤ちゃんはどうして生まれるの？　どこから生まれるの？」と繰り返し訊かれてはいても、未だ六、七歳と思われる幼い少年に、帝王切開の手術を見せるようなことをするのは、まったくの非常識であり、また考えられないことであるからだ。アンクル・ジョージが医師と共に駆けつけなければならない事情があったとしても、ではなぜ、避難して煙草を喫っているインディアンの男たちのところに預けることができなかったのであろうか？

ニックに帝王切開の手術を見せなくてはならない羽目に陥ったと覚った医者は、息子のショックを少しでも和らげようと、説明をはじめる。しかしまだ手術がはじまらないうちから、ニックは妊婦が陣痛の苦しみにのたうち絶叫するさまに堪えられなくなっている。

"Oh, Daddy, can't you give her something to make her stop screaming?" asked Nick.

"No. I haven't any anæsthetic," his father said. "But her screams are not important. I don't hear them because they are not important.[3]

いくら医者とはいえ、病人の苦しみの絶叫が「重要でない」はずはない。医者の吐いたこれらの言葉は、彼が息子に目撃させなくてはならないさらなる手術の残酷さを軽減し、それへの心構えをさせようと意図して吐かれた言葉として表面的には描かれているが、それだけではないようである。医者が自分自身に向かって吐いた言葉として、ここに置かれてもいるようである。

だとすると、麻酔薬もなく手術をしなければならないこと以上に重要なことが、医者にとって、なにかあると言うのであろうか？

インディアンの夫にとってはどうなのであろう？　妻が麻酔薬もなく手術を施されようとしているとき、妻の悲鳴が、重要ではない、と言う医者の言葉を聞くと同時に、「壁の方にドシンと寝返りを打つた」という描写は、何を語っているのであろう？　すべてを見渡せる位置にいながら、それまで医者に対して一言の挨拶にせよ、感謝にせよ、言葉を発しないインディアンの夫が、医者たち白人の言葉を理解できる人間であると語っているのであろうか？　それもあろう。だが、どうもそれだけではないようだ。なぜなら医者の言葉に対する彼の反応は、医者とアンクル・ジョージをはじめとするその場にいる人たちに背を向けることであったのだから。彼にも、医者と同様、手術以上に重要な、生死に係わる心配事があったのであろうか？　あったとしたら、手術およびその場にいる人たちに、背を向けるという動作によって、それを表現した、と描かれていることになる。

Ⅲ

ところで医者は、なぜ麻酔薬も手術用のメスや手術の傷を縫い合わせる針と糸などを携えて、インディアン・キャンプへと往診に出かけなかったのであろう。それは物語りの冒頭の場面から、読者が容易に判断できるよう描出されてはいるが、次のようにはっきりと説明されてもいる――

"Those must boil," he said, and began to scrub his hands in the basin of hot water with a cake of soap he had brought from the camp.(4)

つまり医者、アンクル・ジョージ、ニックの三人は、インディアンが〈医者〉を迎えにきたとき、キャンプを張っていたのだということが。なんのキャンプか？　それは魚釣りのためのキャンプで、そこに寝泊まりして、魚釣りをしていたのだということが。ではなぜ医者は家に帰って、ニックを母親のもとに預け、手術に必要な医学機材や薬を取ってこなかったのであろう？　ここは、前回取り上げた *The End of Something* の最後の場面、〈ビルはなぜマージョリーと別れて岬に一人残されたニックのところにやってきたのか〉という場面と同様、作者が意図して行間という水面下に沈めた場面で、したがって、沈め隠すことによって、重層的にいくつかの場面を描出するという、ヘミングウェイ独自の手法が使用された場所といえよう。

まずインディアンたちは、なぜ人間が最も深く熟睡している夜明け前などという時間に医者を迎えにきたのであろうか？　赤ん坊が医者の手を借りなければ生まれないということは、一昼夜以上も前にわかったはずなのにだ。医者が家から離れた場所に張っていたキャンプの場所を捜し当てるのに時間がかかった、ということはあるであろう。だが医者の家を訪ねた彼らは、医者の妻から大体にせよ、キャンプの位置を教えられたはずであるから、丸一昼夜も捜し回る必要があったとは思えない。ではインディアンたちが医者を呼ぶべく、自分たちのキャンプを出発したのは、いつだと作者は言うのであろうか？

陣痛がはじまって一昼夜ほど経った前日の朝だ、と考えると、ランタンを持っているのは奇妙だし、また昼間ならば釣りをしている医者の一行を湖に見つけるのはそうむずかしくはないはずであるから、このように一晩中捜し回ったあげく、明け方に居場所を突き止めるなどという事態が起きはしなかったであろう。とすれば、二人のインディアンが医者を呼ぶために自分たちのキャンプを出たのは、前日の午後、それもかなり時間が回ったときであった、ということになる。なぜこのように遅れたのか？　それは医者を呼ぶことを良しとしない人間がいたから、というのであろう（それが誰かについては本論の後半部で明らかにするつもりである）。

なんとか明るいうちに、電気のない部落に医者に往診してもらおうと、二人のインディアンは考えてキャンプを出発したのであろうが、医者が

家にいなかったので、医者を探すはめになった、と言うのであろう。妊婦の陣痛の苦吟の聞こえない場所へインディアンの男たちが避難をしたのは、その後のことであろう。こうして夜、暗闇の中を医者を探す羽目になった彼らは、ランタンを取りにキャンプに帰って、再度出発した、と語っているのであり、一晩中捜し回った末に、夜明け前にやっと二人のインディアンは医者のキャンプを見つけることができた、というのである。かくして、医者は、手術に必要な機材や薬を取りに帰る時間の余裕はないと判断し、インディアンのキャンプに向かった、というのである。

Ⅳ

アンクル・ジョージの不思議な挙動は、医者の挙動にも伝染する——

"Pull back that quilt, George?" he said. "I'd rather not touch it."(5)

医者はまるで妊婦の夫に命令しているような口調である。ということは、医者はすべての事情に通じている、ということを表していることになる。

この時代、やむにやまれぬ事情がない限り、白人の医者がインディアンの部落に往診することなどありえなかった。そういう状況にインディアンたちは置かれていたのだ。インディアンたちに治療代金を医者に払う経済的余裕がなかっただけでなく、インディアンたちは人間とは認められてはいない時代だったのだから。インディアンたちが人間としての地位を、徐々に獲得しはじめたのは、第二次世界大戦以降、とくにベトナム戦争以後であるのだから。それなのに医者は、しかも夜明け前という時間に、手術用器具に代用できそうな釣り道具を自分のキャンプでかき集め、大急ぎでインディアンのキャンプに向かっている。医者ならびにアンクル・ジョージは、このような時間に、インディアン・キャンプに駆けつけなければならない、一体どのような〈やむにやまれぬ事情〉があった、というのであろうか？

アンクル・ジョージの奇妙な振る舞いは、さらにつづく——

Later when he started to operate Uncle George and three Indian men held the woman still.(6)

女性の身体の手術、とくに帝王切開の手術に、男が立ち会うなどということは、この時代はとくに、現代でも、夫は別として、ありうることではない。まあこの場合は、手術台がなかったゆえ仕方がないとしても、少なくとも妊婦と性的関係があるか、血縁関係にあるものが、妊婦を押さえつける役を担うことになり、医者以外の男性は、この場にいるべき人間ではないはずである。ということは、ここはアンクル・ジョージとインディアンの女性との関係が完全に明らかにされている場面というこ

とになる。彼がこの女性と一年ほど前に肉体関係を持っていた（現在もそれはつづいているのかもしれぬが）ことが。しかもそれは、妊婦の父親と兄弟、とくに兄弟の一人である若いインディアンの手引きで――彼はアンクル・ジョージを白人のボートに乗せて漕ぐのに慣れている、と描かれている――かなり強引に結ばされたのだ、ということが、婦人を押さえつけるアンクル・ジョージとインディアンの男たちの行動とに重ね合わされて描かれていることになる。こうして、ここまで読み進む過程で、少年によって目撃されたアンクル・ジョージの奇妙な振る舞いに対する疑問の大部分が、氷解することになる。

それにつづく描写は、インディアンの婦人とアンクル・ジョージのそれぞれが心の奥深くに隠す、相手に対する感情を暴いて見せていることになる――

She bit Uncle George on the arm and Uncle George said, "Damn Squaw bitch!" and the young Indian who had rowed Uncle George over laughed at him.(7)

妊婦がアンクル・ジョージの腕に噛みつく行為は、少なくとも二つのことを語っていることになろう――自分の兄弟の一人の手引きで半ば強引に初めてアンクル・ジョージと関係を持たされたときに彼女が示した反抗（アンクル・ジョージに噛みついたという）と、さらには夫との間にできた子供かそれとも白人の男との間にできた子供か、どちらか不明の子供を生まなくてはならないという苦境の原因を作り出したアンクル・ジョージに対する彼女の憎しみの大きさとが、語られているのであろう。

ののしり、というのは、それを吐く人の心の闇を、一瞬、照らして見せる火花である。したがって、「インディアンの売女メ」と叫ぶアンクル・ジョージののしりには、インディアンの女性に対する、いやインディアン全体に対する彼の心のありようが暴露されていることになる。インディアンという存在を、自分より劣等な存在だと考えている彼の心に潜む巨大な差別意識が暴かれていることになる。自分たちを迎えにきた妊婦の父親と兄弟の一人であるインディアンにタバコをやる彼の行為に象徴的に示されているごとく、インディアンたちに物質を恵むことにより、それと交換に自分の欲望を満足させるものをインディアンから奪取してきたというのである。彼は物質的に困窮している妊婦の血族に物質を恵むことによって、インディアンの女性を性の奴隷にしてきたというのである。

だが見方を変えると、妊婦の血族たちは、物質に釣られて心を売った、心貧しい、〈卑屈な〉インディアンたちであるといえる。とくに妊婦の兄弟の一人である若いインディアンは、その最たるもので、彼は限りなく卑屈だ――

Uncle George looked at his arm. The young Indian smiled reminiscently.(8)

かつて自分の手引きで、自分の姉妹の精神と肉体を、物質と引き換えに売ったとき、彼女がアンクル・ジョージの暴力に噛みついて抵抗したときのことを連想的に思い出して笑い、後悔のかけらも示してはいないと描かれているのである。

だがかつては気高く、誇りを汚されることを最高の恥辱とし、それを守るためには命をかけて戦ったインディアンをこのように卑屈な存在にしたのは、暴力によってインディアンを抹殺しようとした白人たちなのであった。誇り高きものたちは殺され、誇りを捨て白人たちに卑屈な迎合をして生きることを選んだインディアン以外は、生き残ることはまず不可能だったのである。

インディアンの女性が、自分たち白人のように道徳や節操などに縛られることなく、動物のごとくただ本能のままに自分を受け入れていたのだと受け取っていたのだが、激痛に苦しむ手術直前の妊婦に噛みつかれることによって、インディアンの婦人が誇りを持つ存在であり、したがってそれを汚した自分に対して大きな恨みと憎しみを抱いていることをアンクル・ジョージは思い知らされることになる、と描かれているのだ。

医者は、自分たち白人がインディアンに対してなした残虐な行為を繕おう（縫い合わそう）と、一生懸命である。しかしインディアンの素手での反抗によって、自分と同類のもの（アンクル・ジョージ）が負ったかすり傷の手当も忘れない。

Ⅳ

ところで、生まれた赤ん坊は、アンクル・ジョージとの間にできた子供であったのだろうか？　それともインディアンの夫との間にできた子供であったのだろうか？

She was quiet now and her eyes were closed. She looked very pale. She did not know what had become of the baby or anything.(9)

Or anything とは、一体何を意味するのであろうか？　作者は、ただこれら二語をつけ加えることによって、この作品が、単にインディアンの女性の帝王切開による出産を目撃する少年についての物語りではない、ということを示しているのだ。

Or anything とは、生まれた赤ん坊の父親がどちらであったのかということ、およびそれによって惹起されるかもしれない事件や波紋のこと、の二つを指しているのである。それについては後述することになるが、彼女は、自らが属する民族に対する他民族による残虐この上ない暴力に対して、彼女なりに抵抗した、と描かれていることは、間違いない。

Uncle George was standing against the wall, looking at his arm.(10)

アンクル・ジョージが自分の腕を見つめている描写はこれで三度目である。これほど極限まで言葉を削りに削った作家が、三度も同じ場面を描写したということは、作者が読者に確実に伝えたいと望んだこと、つまりアンクル・ジョージがインディアンとはこういうものだと考えてきた固定観念が、根底から覆されたことを、語っているということである。インディアンが自分と同じ人間であることを理解させられたということだけでなく、自分たち白人によって人間としての尊厳を犯されつつ生きなくてはならない彼らの苦境を理解させられたアンクル・ジョージの衝撃の大きさをも描いているのである。

医者の気分は、それに反して、高揚している。自分のキャンプを出発したときから抱いていた不安が消散し、成し遂げた医者としての仕事に対して誇らしげである。彼の不安とは、もちろん子供が自分の弟であるアンクル・ジョージの子供かもしれない、との予測から生じた不安であった。医者がこれほどはしゃいでいるという描写は、彼の不安が解消したこと、つまり生まれた子供がインディアンの夫との間にできた子供であったので、面倒を逃れることができた、と喜んでいるさまを示していることになる。

次いで子供がインディアンの夫の子供であることが、さらに明白に示される——

"Ought to have a look at the proud father. They're usually the worst sufferers in these little affairs," the doctor said. "I must say he took it all pretty quietly.[11]

these little affairs とは白人たちにとっては、今だからそういえることで、赤ん坊の顔や姿を見るまでは、そうではなかったはずである。またインディアンの夫にとっても、生まれてくる子供が自分の子供か、それとも白人の子供であるかは、大きな問題であるかもしれない、と医者が推測していたことを、この文章は語っていることになる。医者たちが自分の住む小屋にはいってきて以来言葉を一言も発しないインディアンの夫を、医者に「すべてをとても静かに受け入れたものだな」と評させることで、インディアンの男たちがすべて小屋から遠く離れた場所に避難しているのを見撃して以来生じていた、インディアンの夫がわずかに生き残った誇り高いインディアンであるかもしれないとの恐れと危惧が消散して、彼が安堵し、インディアンの夫を揶揄しているさまを描いていることになる。またその恐れと危惧が、幼い息子を帝王切開の手術中も手元においておく必要を医者に強いた、主な理由でもあるというのだ。

だが医者の判断は、まったくの誤りで、彼と彼の弟を、一気に驚愕と狼狽の闇へと突き落とす場面へと転回する——

He pulled back the blanket from the Indian's head. His hand came away wet. He mounted on the edge of the lower bunk with the lamp in one hand and looked in. The Indian lay with his face toward the wall. His throat had been cut from ear

to ear. The blood had flowed down into a pool where his body sagged the bunk. His head rested on his left arm. The open razor lay, edge up, in the blankets.(12)

インディアンを白人である自分たちとは違う、知能的にも感情的にも劣等な存在だと考えていた医者にとって、インディアンの自殺という行為は、予想もしていなかった行為であった、というのだ。自分たちが軽蔑し、差別し、人間とは見なしていない生物がなす行為ではなく、高潔で、誇り高く、勇気ある、愛にあふれた人間のみが成しうる行為であったというのだ。つまり自らの生命を断つというこの行為は、高い誇りと深甚なる愛を所有する人間の、誇りを守り、愛を貫くという、目的に適う唯一の行為であったというのだ。

インディアンの死にぎわの姿態とカミソリの描写は、インディアンが自分はどうすべきか、悩みに悩んだことを示す描写であると考えられる。貧しさに付け込んで妻を自由にしたアンクル・ジョージにカミソリで切りつけるべきか、それとも自らを殺すべきなのか、それ以外には方法はないのか、と。そして最後に、結局、自らを殺すことによって、妻を、子供を、仲間を救うという方法を選んだということが。

もちろん生まれ出ようとしている子供が自分の子供であるかどうかは、彼にはわからなかった。自分の子供である可能性があると考えはしたであろう。

ところで、インディアンの夫はいつ自分の喉を掻き切ったのであろうか？「喉を片方の耳からもう一方の耳まで」という言葉に惑わされて、麻酔もかけずに手術される妻の苦痛の叫びを聞くに堪えられなかったというのがその理由だ、と考えてはならない。妻の苦悶するさまを二日間堪え忍んだ夫が、医者が到着して痛苦が止む目どが立った、しかも自分の子供が生まれる直前に、そんな理由で自殺すると推理するのは、単純で、あまりにもセンチメンタルだ。「喉を片方の耳から、他の方の耳まで」と描写しているのだから、聞きたくはない、あるいは聞いてはいけない声や音を逃れるためであったことは間違いない。では彼が聞いてはならないと考えた声、あるいは音とはなんであったのだろうか？　妻の苦悶の声でないとすれば、他にはただ一つしかありえない。すなわち、生まれ出た赤ん坊の声以外にはありえないということになる。たとえ自分の喉を掻き切ったあとになっても、まだ意識があるうちに赤ん坊の泣き声が聞こえたら、本能的に生死にかかわる疑問の解答を求めて赤ん坊を見下ろしてしまうだろうと考え、それを避けるために、耳の機能を破壊すべく、このような喉の掻き切り方を選んだのだ、というのである。しかも彼は顔に毛布を被ることによって、これを避けるべく二重の方策を講じた、というのである。

ここには、インディアンの夫がいつ自殺したのか、が語られていることになる。つまり赤ん坊が生まれる直前であった、ということが。もし赤ん坊が生まれたあとならば、医者が赤ん坊を手で逆さに吊るし、音を立てて背中をたたいて羊水を吐かせるわけだから、それを目撃して、自分の子供であることがわかり、自殺することはなかったであろうからだ。

この誇り高きインディアンは、もし生まれくる赤ん坊が白人の子供であったら、自らの誇りを守るために白人と戦わなければならなくなり、したがって自分の親族だけでなく部族全員を皆殺しの危機に追い込むことになると考えたというのである。事情を知っている部族の男たちは、彼が部落で唯一誇り高き男であることを知っているので、生まれくる子供が白人の子供であると、小屋で大騒動が起こることになり、それへの係わりあいになることを恐れて、「女のあげる悲鳴の聞こえないところで、暗闇に座ってタバコを喫っていた」、というのである。

インディアンの夫は自殺することによって、民族の誇りと部族の生命を守っただけではない。彼は自殺という行為によって、自分たちインディアンが誇りと愛に充ちた勇気ある人間であり、白人たちが卑劣で傲慢な人間であるという現実を、白人に突きつけたと言うのである。さらに自殺という行為によって誇り高きインディアンは、医者とアンクル・ジョージに、彼らが心貧しく、暴力的で、傲慢で、欲望に囚われた下劣な人間であることを認識させることになったというのである。Joseph M. Flora が次のように語る部分は、その意味で、正しいと言える——

The Indians were a vanishing race and for that reason often judged inferior, but "Indian Camp" conveys a great sense of their humanity, of their suffering and ability to love, and of their solidarity.(13)

VI

こうしてアンクル・ジョージは、この物語の中ではじめて、人間的な行為を行なうべく、医者とニックと共には、自分たちのキャンプに戻らないことが示される。ニックが父親に訊く——

"Where did Uncle George go?"
"He'll turn up all right."(14)

アンクル・ジョージが行った場所、それは当然セント・イグナスであり、彼はそこへ看護婦を迎えに行ったのだということは、水面下深く沈んでいる場面ではない。手術を終えた医者が言う言葉から理解できるからだ。

"The nurse should be here from St. Ignace by noon and she'll bring everything we need."(15)

実現可能の確実な意志を示す shall ではなく should をつかうことで、インディアンの部落に看護婦を呼ぶのは易しいことではなく、インディアンではなく白人の、しかも自分の弟を送れば、セント・イグナスでは看護婦を派遣してくれるであろうが、果たして弟が行ってくれるであろうか、と医者が確信がもてないでいることを表しているのである。医師

はもちろんのこと看護婦だって、物質的に貧しく、白人の目に不潔で、町から遠い森の奥深くに張られたインディアンのキャンプになどきてくれるはずはない、と医者であるニックの父も考えている、というのだ。インディアンの高潔な行為に衝撃を受け、なにがしかの反省に捕らわれたアンクル・ジョージが、自らの卑劣な行為を補償せんとしてこの役を引き受けた、というのである。

ところで医者は、「アンクル・ジョージはどこに行ったの？」というニックの質問に、なぜ正確に答えないのであろう？　それは、もし真実を話せば、あとになって不愉快なことが起こる可能性があるから、というのであろう。不愉快とは――もし真実を話せば、ニックがあとで誰か、とくに母親つまり医者の妻に話すことになり、慣習的には白人が決してやらない行為を医者とアンクル・ジョージがやったことが妻にわかり、その理由を問い詰められたり、勘ぐられたりするからで、医者はそれを恐れたと、いうわけである。このことはこの長編形式をとる短編集の次の作品、*The Doctor and The Doctor's Wife* を読めば、さらにはっきりと理解できよう。生まれた赤ん坊がアンクル・ジョージの子供ではなくインディアンの子供であったことに、異常なほどの喜びを見せている医者の描写には、恐れていた最悪の予想が現実のものとはならず、杞憂に終わってくれたための安堵が重ね合わされて表現されているのだ。

したがって医者は、インディアンがなぜ自殺したのか、その理由を訊かれても、自分にはわかっているその理由を、ニックに説明するわけにはいかない――

"Why did he kill himself, Daddy?"

"I don't know, Nick. He couldn't stand things, I guess."(16)

ニックに受け入れられそうな理由、本当の理由とは違う理由を口にするわけだが、I guess. とつけ加えることによって、嘘を言わざるをえない彼の苦しい心を覗かせている。もし「いろいろなことに堪えられなかったんだろう、きっと」という医者の説明を信じてしまったら、そのときは、子供の目で見、子供の耳で聞いたことを、大人の耳目で視、聴いたことに判断し直す作業を疎かにしたことになり、作者の構想を摑むことに失敗したことになろう。ニックでさえ、何かもっと明確な理由があるはずだ、と直観的に覚っていると描かれているのだから――

"Daddy?"

"Yes."(17)

ただニックには、それをどう質問すべきかがわからないだけなのだ。それでニックは、その代わり、関係はあるが間接的である、「アンクル・ジョージはどこへ行ったの？」という質問を行なう、というのである。インディアンの自殺にアンクル・ジョージが係わっていることを、ニックが薄々感づいている、ということを描いてもいるのである。

The End Of Somethig では、物語りは太陽の照っている午後の半ば

よりはじまり、太陽が沈んで闇にあたりが埋まってしばらくしたときに終わる、という時間設定がなされ、この物語りが暗いテーマを展開していることを示す背景を成していたが、*Indian Camp* では、物語りは、夜明け前の暁闇の時刻にはじまり、途中で夜が明け、やがて太陽が昇ってきたときに終わる、という時間設定が成されている。この一事からも、この物語りのテーマが輝かしく、明るいものであることを、語っていると考えられる。

だがその明るさが、出産の戦いに勝利し、子供が無事に生まれた歓喜の表現を補佐する背景であるとして片ずけてしまえるほど単純でないことは、言うまでもないであろう。生まれた子供の父親は、生まれる直前に自殺してしまっているだけでなく、白人によって先祖の土地を奪われ、そのほとんどが虐殺され、しかも現在、自分の部族のものたちを虐殺した張本人である白人に雇われて、何とか生き延びて細々と暮らす民族の末裔として、赤ん坊は生まれてきたのだから。

では作者がこの作品のテーマを明るいものだとする要素として、考えられる内容はどのようなものであろうか？　人間としての誇りを失わず、高潔で、愛情深く、真の勇気を所有していた人間である父親の血を受け継いだ子供が生まれ出たことは、明るい内容であることに間違いはない。だがそれよりは、多くの人間たちが喪失してしまった高次の人間性を、苦境の中で失わないでいることこそ人間として必要なことで、それこそ闇の深まり行く世界における一縷の光明だと、作者は語っているのであろう。

いまだ幼い少年が、（人間の生と死を目撃する）という、海面上に現れた氷山の下の海面下に、その七倍の量の人生模様を沈めることによって、ここにヘミングウェイは、ヒーローが一言も言葉を発しない物語りを、完成させて見せた。ハードボイルドとシンボリズムのスタイルをもってして、はじめて発案しうる挑戦であり、その試みに成功したということは、二つのスタイルを極限まで発展させることに成功したことになる、といえるであろう。

Ⅶ

ニックの父親同様、ヘミングウェイの父親は医者であったが、彼も自殺をした人間である。したがって父親と彼は、親子二代連続して自殺をしたということになる。父親の自殺の原因については、色々言われているが、父親自身が作品を書き残してはいないので、作品からは探りようがない。だが作家であるヘミングウェイの自殺の真の要因に関しては、作品の中からこそ探りだせるのではないか、との考えは、前号でも述べたが、*Indian Camp* にも、手掛かりが書き記されていると思われる

"Is dying hard, Daddy?"

"No, I think it's pretty easy, Nick.　It all depends."(18)

「死ぬことはとても簡単なことである」が、そうでない死もあること

に、インディアンの自殺を目撃して、医者が覚ったさまが、「すべて場合によりけりだけどね」という言葉で表現されている。しかしニックはまだ、インディアンの自殺の原因を判断できるほどの年齢に達してはいない。彼はまだ、ただ死ぬときの痛苦への恐怖に捕らわれているだけの子供である。したがって彼は、いずれ大人になり、誇りと愛と勇気を所有したときに、人間としての尊厳を守るために死なざるをえない状況に立ち至る場合があるかもしれないことを、理解しえていないことになる。したがって物語りの最後で作者は、ニックに次のように考えさせている

——

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die.(19)

ここには、ヘミングウェイが平凡なる一般的な死ではなく偉大なる死に、「キリマンジャロの山頂という最高所の雪の上に、至高の生の価値を捜しつつ死した姿のまま、永遠に、腐敗せずに横たわる豹」のごとき、高次なる意味をもつ死というものに、激しい憧憬を抱いていたことが示されている。高次の死は高次の生に付随したもので、高次の生を生きようと専心努力しつづけた人間のみが、高次の死を実現できる、とヘミングウェイが考えていたことは、間違いない。

Kilimanjaro is a snow-covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. It's western summit is called the Masai "Ngaje Ngai," the house of God. Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained what the leopard was seeking at that altitude.(20)

高次の死がもつ高邁な価値を理解することのできる人間は、高次の生を生きようと生命を賭して戦っている人間だけである、というのであろう。

Indian Camp の幼い少年、ニックが、インディアンの自殺の真の理由を理解できないのと同様、豹がアフリカの最高所で生命を賭して探していたものが何であるか理解しえた人間は、（自分を除いては）誰もいないのだ、とヘミングウェイはいっていることになる。それほどの高次の死に方を理想として、高次の生を生きようと、ヘミングウェイはしたということになる。

処女作と言ってもよい作品の巻頭の短編の最後が、「自分は決して死にはしない」という言葉で終わっているのは、まことに象徴的である。作家としての最初から、生と死、〈いかに生き、いかに死ぬべきか〉という問題に、作家が逃れようもなく憑かれていたことを、示しているからである。

注

(1) Ernest Hemingway, *The First 49 Stories*, Jonathan Cape, 1986, pp. 86,87.

(2) Ibid., p.87.

(3) Ibid., p.87.

(4) Ibid., p.88.

(5) Ibid., p.88.

(6) Ibid., p.88.

(7) Ibid., p.88.

(8) Ibid., p.88.

(9) Ibid., p.88.

(10) Ibid., p.89.

(11) Ibid., p.89.

(12) Ibid., p.89.

(13) Joseph M. Flora, *Hemingway's Nick Adams*, Louisiana State University Press, 1982, p.30.

(14) Ernest Hemingway, *The First 49 Stories*, Jonathan Cape, 1986, p.90.

(15) Ibid., p.89.

(16) Ibid., p.89.

(17) Ibid., p.90.

(18) Ibid., p.90.

(19) Ibid., p.90.

(20) Ibid., p.53.